

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT
Black

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

繪本梅花氷裂

八

13
1908
8

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

13
1303
8

梅之與異衛 梅花春水卷之二



東都

南仙笑楚滿人編述

第十三齣

明誠心諫上

爰示亦與四言清ハ如何いかにももと鍋藤四郎の刀を詮美は知しりりと
うたふふ敵た景けい文ぶん太たがが行ゆ来きと探た需いんん夫お人ひとままままをを排は回くわいりりと
刀を對たいせせ者ものと見みるる時ときの喧けん嘩わをを仕しけけて怒いかりをを起おこせせ刀を拵たててあ
ててままをを改あらためめ見みるる自おのらら知しるるままののやああららんと倚よりり使つか客かくととままのの變かりり
爲なをを流ながるる一ひとつつ保た達たつ衣いをを着き一ひと又またいいろろぬぬるる故ゆゑああらら常つねにに流ながるる終つひ
預ありりのの後あとををああろろ一ひとたたるるをを冠かんむりりり長ながきき二ふた腰こしをを搦とりり日ひ毎ごとくく流ながるる窟くわの
曲まが輪りんをを搦とりり志こころけけるる都みやこととはは頃ころハハ我われ國くにの遺い風ふうととくく使つか客かくとといいふふのの許ありり

梅之與異衛 梅花春水卷之二

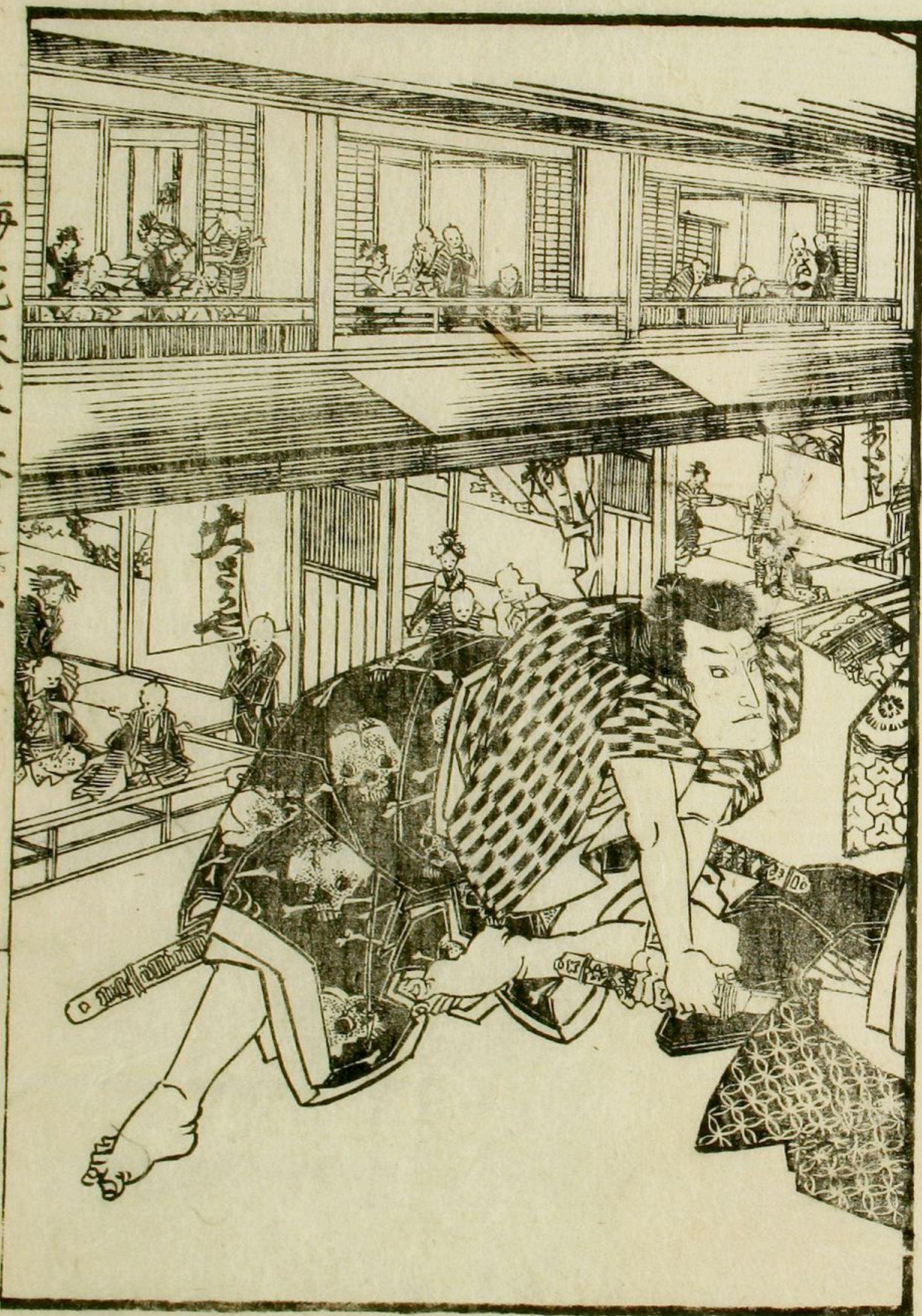
一

髪あつがるつふ深見函ひと呼ぶ退糧ありは群の皆つ振は探摺の毛を
 必く大小の柄を巻くつるを帯せり是れものうちの送つてさつがわつるべ
 さまが世の人をい探摺柄組と卓号せり今も尚李園の雜劇よ
 白柄組とさつる探摺柄を模訛さるううう彼の閑心と念ゆらる
 者ぞこのいのは誠は彼の子四喜流龍次郎ホがわつる俱不裁天の歌さる
 旧名は袁丈太さる日外待乳山の麓わく不意さくも夫さる高藤西郎の刀
 と得く太は怪び已がう料さるて常に帯し又彼の氷姿流さるも
 肌を放さる持けるゆゑ其後乃後へて藤の丸持ホが丸心魂も障化
 さるさびかのけまが金銀のあつるふまうせつ日毎は廊へ入つて込さる
 下の小絨さるつ義身と号けて曳連は社遠せぬしと麻法さるて

有てさびむるさるは皆道と譲りて通しけまが弥我意さるる金浪
 と野たたらんと因ふくさるる時乃無と喧嘩又律よせと譲りのものを
 奪ひさる無法よお鄭と傳若毎人の振奪さるりける程は廊中の
 者いれり更さる探摺柄組と号さる血弾しと忌嫌さるる者さる
 了けりまよ引さるさ四喜流が群の強ささ下さ弱を助けさるら仁
 義と回さるける程ふ人呼ぶは美組と号稱けるさまが子四喜流と
 函の六垣は花街とて回さる合とといへり神さるぬ男の敵とて知ね
 ば仇さるさるも函の根奪何と申さる得が死さるさるりける程とて
 とさるさるをさる探りける案下甚生再脱唐琴龍次郎暫さる當

心が羨望の者なり。凡そ汝も二腰をたまたま武士の心
 なども我々が敵刀のこぞや汝が刀の當りたるは拵扱もな
 けりるるハズ礼を極るまは其居るハ敵一殺し難く魁首同心
 の面前中々引れり。魁首の羞憤は但しとてさうり思ひ
 込へけりるる。毎念ふるも多勢に多勢。給方ろくそ刀の
 うち。よ西兵六例も曲入り必む時分何心なく来たか
 喧嘩とけり。又例の探柄組の業は業とんと群集は
 押多くとえれば置けり。推公同心のそ牙は為の捕られ
 刀をたれ走り去て推公狗を取る漢の小腕拾あげ傍に僅と
 残の奴等。援連く切て掛る成俸たせ刀のた取散た打散

権八を後、田ひまらふ地終とて刃へはける。這時困り揚屋の樓
 上は酒盛りありけり。初とて飛ぶ来り物言ひは、今四
 又せりるにゆゆの丁とて交り誰人かと思ひ、は面ハ豫て見
 識る探柄組の魁首とや。困心どつと見交り何ゆかる狼籍
 と言ひせもあむ。聞心ハ何と冷笑ひは、梅の今四番とや。人
 まる自茹する素町人の分際、あて我輩と同一く、俠客さんぞ
 最片後いひは、折も有らば一刀の下は、泉下の鬼ころさんと
 時とて来はまはる童の我が子分の者へ對し、不れとをいひ
 夫をさめて言繼し、折檻するを汝も我美事を鄭教ら。童が肩
 持顔、まこと可笑けり。梅の勢ゆるも我一刀は落花未垂



原身強く、勝負を好まぬ子四三浦、困るも、お角の山を、お角の
 ぬも、いかに、いかに、一旦、救済、いかに、いかに、いかに、いかに、
 あり、あり、我黨のせざる、呼ぶ、まご、白刃の、下は、男、と、情、ま、ご、ご、ご、
 氣、性、山、は、あ、回、は、め、い、い、て、今日、の、喧、嘩、お、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 ち、あ、あ、ま、
 こ、こ、有、る、ら、あ、ま、
 煙、み、
 と、拂、ひ、退、け、武、士、の、帯、び、の、魂、と、町、人、風、情、の、子、四、三、浦、が、む、ご、ご、ご、ご、ご、
 ち、あ、
 た、ま、

連、足、手、は、ひ、
 妾、が、何、も、ま、
 彼、も、ま、
 取、ら、ぬ、悪、い、
 あり、と、山、は、遠、と、返、り、子、四、三、浦、の、双、眼、は、涙、を、浮、め、推、八、の、向、ひ、情、あ、あ、
 た、六、喃、付、番、の、冠、は、ま、
 新、羅、衣、は、ま、
 麻、衣、は、ま、
 ち、あ、
 あり、い、

袖交が物結をまよつけても人間の栄枯浮沈をどなるおきものいあら
 ず誠や行河の流るる流るるしてあつても元の水は非ざと故人の歎くも
 宜うの敵持方ハ控更ハ控更もあまぬけ男の上もろるは夢の夜は世と
 行末敵方と思ひつげ水の面を赤緑め沅湘日夜東流去て愁人の
 暫くも止まらざらしむる詩も思ひぢくまばー河をまよるはそれハ
 くるぬ離妓のたより推ハが袖をひく花魁のさこそ待従て居るへき
 又速歩もといそぐへるに曳まつゝ来るもまよるの別荘の庭
 へまばハ山系ハとまよるとんるより琴うりゆりく推ハは向ひるどは箱
 ハ跡もあまが絆へ来るいぬハ外は増花の出来もあまつる最恨も
 由意やとあつとつる推ハも詮方ゆく脊をまよるまよる全左もあつ

豫て皆老同穴の終をむすびハあつていふでハ見捨る夏あつらんや海
 火の中よりともた燃びて目如及本意を遂本國へま散るはあつても
 をまよるまよるあつていふ今この憂苦を昔結よまよるまよるまよる
 此間より度々文をて言後りー如く先達と閑心子四ま清と曲輪を
 喧嘩のお柄技敵奪ハカハ正しく我々が尋る痛藤四郎も似まハハ
 をまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる
 といふまは京のまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる
 時も傍をまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる
 を訊問へど大直の物まよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる
 のりと有るまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる

梅の持さるる。尚を境の裏は梅の花の形を渡す。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

 梅の持さるる。境の裏は梅を待た。如何の夫をある。

然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。

 然らば速丈を酒めく。喉ひあせ酒宴を催す。怒言を以て。



困心が常なるをう羽織とちがけけしむが借とて勢睡せしむが
 たると山紫ハ何れあるある困心と漆師きて居るはあつと思ふは
 まづちあつとくまむきづめあつとく庭の切戸を押明と襖入り
 接類はあがり屏風の切つた逆つきと音高しうふあつとら
 奈何の深見岡公城の名ハ旧き管家太とて起む斯くは俺們的
 先年論候時あつと汝がなるは非命なるは唐琴浦右の
 郎まづの家謀略の素数をうが子子四まの父兄の死をおんが
 愛はあまの迷いであひく務負とせしむと馬とて思ふ音も
 せざるは借の風を喰ひて逆失やと屏風とてう返る指子
 吹ひむ夜風はあつと消くまの音縁と用きやあつとけし束の

内より面と白み白双をう後げ踊と出るは推ハ子四まの父兄の
 逆つとせと切つと二太刀三太刀お合せが所詮敵とてお返
 ひけと遠をう合逆とてするは後より兄の敵とてままとたあつて
 切つたれはあつと玉消しとあつとて其所は倒とてあつとて子四
 まの切らんとするをまうけくか待のより四まのどの我まと言は
 酒市をうきとつ折しと雪回を漏れ知る月の光の面をうは言
 らん哉困心と思ひハ山紫あつとあつてけしむが疑はれとて大
 何故は山紫ハ男子の事形とあつと務と衆と名のり俺們のあつと
 ひのきとあつと一是ハハ深き換子有るはあつと人迷と語とあつと
 左右より取りつとて保まは山紫ハ最苦くげは二箇は向ハ最

ニツハ皆老の契ちぎとをこめし山やま素もと生なまてハ室むろを同おなし死してハ穴あなと
 共ともままとと樹ちひひののまま比ひ翼よく塚づかの名なをを残のこししるるババ死しねねるるカカののああしし
 心こころ中ちゆうののああももるるららんんうう子こ四し邊へん傍ぼうううるるみみ斗とららふふべべとと岐まとと負おののの妹い
 氣けはは伏ふ洋やうむむむむららんん今いまもも尚なほ好この古ふるのの人ひと荊け棘まきのの林はやしはは貞まこと婦めかけのの
 のの礎いし言ことははままとと殘のこるる比ひ翼よく塚づかのの周いん縁えん形かたちととああららままししけけりりととああららんん
 語ことばとと傳つたへへぬぬ。

梅花春水卷之二終

